

西浦 作品を拝見して、白がとても素敵だなと思いました。韓国の作家のハン・ガンの小説『すべての、白いものたちの』は、白にいのちを象徴させています。長谷川さんの白といのちは、どういうシーンからはじまったのでしょうか。

長谷川 はじめに意識をしたのは小学校にあがる前で、新潟は冬になると雪が一面に積もって、遠くまで真っ白で平らな地平が広がるんです。その平原をひとり歩いて記憶があります。そのとき自分が何を感じたのかというと、いのちが覆い隠されているわけですね。真っ白で何もないところに自分だけがいるという、怖いような、ちょっと寂しいような、切り離された自分の存在を意識した瞬間でした。

西浦 私は、白い雪と灰色の空が果てしなく続くような、茫漠とした、自分はどこに連れて行かれちゃうんだろうという感覚が怖いので、長谷川さんの感覚は新鮮に感じます。

長谷川 自分がどこから来て、どこへ行くのかという深い問いを意識した瞬間だったのだろうという思いがありますね。

西浦 制作にあたって無意識の世界とのかかわりを大切にされていると伺いました。

長谷川 最初は絵を描いていたんですけど、うまくなりたくていろんな本を読んだんですね。でも頭で考えれば考えるほど作品が悪くなっていく実感がありました。そういう経験をして彫刻に移ったので、身体感覚や潜在意識にアクセスしてつくったり描いたりしていたんだと自覚したんです。アートには真実という意味もありますよね。人間の知識や概念には色が入ってくる。社会を動かしている人の意図や、何かの都合が入りこんで、真実から離れていく可能性がある。でも言葉になる前の潜在意識は、自分の身体だったり、その先にある宇宙だったり、すべてとつながっていて嘘をつけない存在だと思うんです。だから言葉で表現できなくても、つくったもののなかには、かならず宇宙のエッセンスが宿るんじゃないかと思うようになりました。潜在意識を掘り下げれば掘り下げるほど、他のいのちとつながれる気がしています。

西浦 お若い頃は、こうでなければいけないと理詰めで作品をつくっていたと伺ったんですけど、今の作品を観たときに、むしろすごく自由な伸び伸びしたのを感じたんです。ご自分を追い込んでいたような状態から、どんな経験を経て今のようになったのか、興味をもちました。

長谷川 うーん……あ、真っ白になった（笑）

西浦 すみません（笑）

長谷川 無意識の世界にアクセスしながらつくり続けてきたことで、私は何者なのかという答えが少しずつたまっていました。そんなに自分を追い込まなくても自然にやっていれば大丈夫という気持ちは芽生えてきたと思います。若い頃はタイトルも無題で統一していたんです。言葉の制約で嘘をつきたくないという気持ちがあって、かなり固い決意をしていたんですけど、誰が誰だかわからないんです。全部無題なので（笑）。自分の都合上よくわからないという問題にぶつかりまして、つくるまでは名無しでいてもらおう、そのかわり、できあがったらあなたの名前は教えてね、というちょっとゆるいかわりになりました。作家さんによってはタイトルありきで、それを表現しましたという方もいらっしゃると思うんですけど、私に関しては、何となく降りてきたタイトルがつけられていると思ってくださればいいと思います。たまにちょっと名前が変わっちゃったとか、そういうのもあったりします。

西浦 東日本大震災の津波で、いわきの生活拠点も作品も全部なくしていますよね。私はハンセン病を患った方々のことを学んでいて、喪失の体験がその後の生き方というか、どういう表現をしていくかということに非常にかかわってくると思っているんです。同じ地平で話ができるかどうかはわかりませ

んが、長谷川さんの場合はどんな経験をされたのでしょうか。長谷川 最初に彫刻をつくっているときには、私が死んでも彫刻は残ってくれるんじゃないかという思いがありました。津波ですべて失ったときに、それが一切消えました。同時に、喪失感があったかということ、そうではありませんでした。つくった記憶が自分のなかに残っているので、別にまた生み出せばいいんじゃないっていう気持ちになれたのは、震災での発見でした。それから場所とか道具に対する執着も消えました。震災に遭ったのが3月11日なんですけど、5月に個展の予定が入っていたんです。避難先の新潟からギャラリーに電話をして。ギャラリーもいわきだったので混乱状態だったんですけど、私に残されているものは制作しかないということで、やらせてくださいと電話を差し上げたんです。実家に助けてもらって、ホームセンターで、鑿一本、のこぎり一本、金やすりひとつ、最低限を買い揃えて。実家の裏に兄が住んでいて、庭に伐採した月桂樹があったので、それをもって実家のサンルームで小品を何点かつくって。たまたま東京で二人展を開催中に被災したので、東京の会場には、いわきで未発表のものが5点くらいあったんです。その作品とあわせて展覧会ができたんですね。そのとき、彫刻をつくるあいだは、震災に遭ったという気持ちがふっと消えたんです。ただつくっているだけ。心のシェルターが作動して、とても平穏な世界が自分のなかにあった。すぐたいへんだと思うときはあるんですが、いったんものをつくりはじめると、海で言ったら、上は嵐で大波が荒れ狂っていても、海の底で静かにつくる時間を持てている。つくことは自分を支えて守ってくれる行為だったんだとあらためて気づかされました。それまでは、ちょっと違ったんです。生活のためにする仕事や活動の余剰の部分で自分は制作ができるというか。震災が起きて、それが逆転した。

西浦 つくることで自分のなかに積み重ねてきたものを表現する、かたちにしていけるのは、すごいパワーだと思いました。

長谷川 自分でも、このままやめちゃうのかなという気持ちはあったんです。でも母の力は大きかったかもしれません。福島から新潟の実家まで車を走らせて避難して、朝の3時くらいに着いたのかな。翌日に母が、道具を買いに行こうって。あなたにはこれしかないからって。そういう後押しをしてくれたんですね。まあ、このまま家にいられちゃう困って（笑）、母も必死だったのかもかもしれません。

西浦 つくっているということのなかに自分が入りこむことで支えられるというのは、ハンセン病の療養所でも聞くことがあります。本当は、ひとりひとり違うわけですね。その違う私が、こういう人間であるということを奪われて療養所に収容されているんですけど、それでも私は私であると言うために表現する。私はこれができる、あるいはアートとかたちでないかもしれないけど、私の生活を支えるための道具はこうでなければならないと一所懸命工夫する。そのなかで力を得て生き延びてきたという気がするんです。そう考えたとき、長谷川さんの作品から生命力の強さを感じました。生きることの根源を、自分が引き受けていく。だからいのちを連想するのもかもしれない。いのちがはじまるときには、人間も動物もあまりかたちに変わりがないんですね。

長谷川 胎児の最初の週あたりって、鳥でも動物でも人間でもとても似ていて、そこから分かれていくということ、大学の生物の授業でスライドを見せてもらって知って。そのとき、根っこはいっしょなんだという安心感があったんですね。人間が特異な存在で、地球を損なってしまっている存在でいいのだろうかという思いを強く持っていたので。調和できる可能性を感じたんだと思います。

西浦 どの彫刻も、本当に生命の最初のかたちというか、何のものにもなっていないんだけど、これから何らかの条件付けをされて、いろんなかたちになっていくわけですね。そうなる前のものをかたちにするのはすごく難しいと思うんです

けど、作品としてあらわれている。誰がものをつくるときもそれはあるのかもしれないけれど、私が観るときは私自身のフィルターを通してしか観られないし、それでいいんだなということを伝えてくれる作品のように思えたんです。

長谷川 むしろ、その方が私は……

西浦 これは触れざるを得ないんですけど、ハンセン病隔離政策では、いのちを生み出す権利が奪われたわけですね。私の知っている回復者で、いつか産めるようになるかもしれないから断種手術はしたくないって言った人がいるんです。彼女は戦後に優生保護法ができたあと堕胎させられたんですけど、あなたは若いんだから妊娠するたびに堕胎手術を受けていたら体を壊すから断種しなさいと言われて、断った。その方がこの彫刻を観たら、とても自由で素敵ねって言うんじゃないかと思ったんです。誰かであるということも、何ものでもないということも許されなかった世界に、この彫刻がひとつあったらどうだったかなということを考えました。それもあって「いのちのゆくえ」というタイトルは、どうしても生まれ得なかったものを想像してしまうんですが、どんなイメージでつけられたんですか？

長谷川 作品から言葉が降りてきたというのが正直なところです。でも私の願いみたいなものは常にあります。私は「おくりもの」というタイトルを何度かつけているんですが、その「おくりもの」が何かという答えを考えてなかったんですね。でも最近、アメリカ先住民のホピ族の言葉を知る機会があって。いのちは星からのおくりものだ、身体は地球からの借りものだ、という言葉からはじまるんですけど、それを聞いたときに、おくりものっていのちなんだって自分のなかでつながって。その詩は、いのちを大切にすることほど愚かなことはない、と続くんです。なぜならいのちを大切にしているのは冒険がはじまらない、お前はお前であるためのいのちをもらったんだ、そのいのちをお前がお前であるために使わないで何に使うんだ、という詩だったんですね。いのちを失うことへの怖れが社会にあまり良い表れ方をしていない場面は、結構あると思います。ハンセン病にしても患者さんを怖れるわけですね。自分のいのちが損なわれるかもしれない、だから怖いから排除して差別してということが起きたり。たとえば私が彫刻で生きていこうとしたときに、怖いわけですよ、食べていけないから。だから真面目についていう言い方も変ですけど、彫刻なんか先のことわからないから、いのちを守るために、自分がやりたくない仕事でもお金になる仕事についた方がいいんじゃないか、とか。いろんなことがあると思うんですよ。国が、上司が、会社が、自分は本当のことを言いたいけど、会社の人からそんなこと言ったら臆にすると言われたら、本当のことを言えない人は、世のなかにたくさんいると思うんです。その認識が全体で変わったら、きっと世界は変わるんじゃないかなという、夢みたいなことを思うときがあるんですね。何のためのいのちなのかということ、みんなで考えられたら、もっと良くなると思います。

西浦 誰かが怖れられる状態になったときに、少しずつでもその恐怖を引き受けられれば、こんなことにならなくて良かったということはあって。たとえばすぐ後遺障害の重い人が、さんざん苦しい思いをして社会復帰して自分の生活をつくっていくとか、いろんな場面を思い浮かべながら聞いていました。少しずつまわりで引き受けあっていくことができれば、ひとりひとりが自分として生きることができるようになるという意味で、それも冒険なのかなと思います。

長谷川 私の夫は安藤榮作で、同じ彫刻をやっているんですけど、このあいだ私が冒険の話をしたら、そうだねって。最終的には死んじゃうし、別れることもわかっているのに、この地上に生まれると決めたことそのものが冒険なのにねって言ったんですよね。最終的には別れなければいけなかったり、死んでしまったりするんですけど、それを引き受けたから生まれてきたんでしょ、と。私もすごく納得したんです。

西浦 先ほどの無意識、自分の意識を超えたところとかかわるのかなと思うんですけど、もっとちゃんと生きなければいけないと思いました（笑）。

長谷川 冒険していると思うと楽しいですよ。

西浦 今のお話を伺って、またひとり思い浮かんだ方がいて。90歳くらいの男性なんですけど、西の方の出身で、今、多磨全生園にいます。彼は症状が進んでから療養所に収容された人で、後遺症が重いんです。でもすごく冒険家なんです。末梢神経の障害があるので、足の裏に傷ができるんですけど、痛くないので気がつかないで歩いてしまっただけで深い潰瘍になって治りにくくなるんですね。そういう傷を持ちながら、バイクに乗ってどこへでも出かけていった。1960～70年代に、患者労働でやっていた看護・介護を、職員の業務にするよう入所者の方が運動した時期があったんですが、そのときも真先に職員のところにいって喧嘩する。いつも一番乗りだったという人なんです。それで2017年か18年くらいに、ハンセン病はもちろん治っているんだけど、後遺症で失明してしまっただけです。彼は触覚や痛覚が乏しくて、手の指も欠損しています。その状態で視力を失って本当に苦しかったと思うんですけど、それでもできることを探していく。彼は義足を使っているんですね。その義足が年をとってだんだん身体が変わって、合わなくなってくる。合わない義足は危険で、しかも目が見えない状態で歩くのは怖いわけです。だから新しい義足をつくりたいんだけど、半年も1年もかけて足に合わせていくとなると不安だな、と。義肢装具士の方も、失明した方の義足をつくったことがないので怖いですねって言ってたんですよ。その話を聞いたのが2019年で、2022年に義肢装具を中心にした展示をやったときに、新しい義足をつくりましたよって。そのときコロナで全然会えなかったんですけど、新しい義足で歩く様子を動画で見せてくれたんです。常に自分が今ここにあることが冒険というか、彼を見ていると本当にそう思うんですね。それは決して彼ばかりではなく、表に1回も自分の言葉が出たことがないような人も、何かをつくることで生きている。療養所でも作品をつくったり、音楽を演奏したりする人はたくさんいます。その人たちにとっては生きていくため、自己実現と言うより自分を支えるためのものだし、自分が行けなくても、療養所の外に作品が出ていくことで、自分が外に出ているのと同じとは言わないけれども、飛び越えていくというか、冒険したんだと思います。今はどの療養所も高齢化してしまって、自分でつくことはほとんどできないけれども、私たちが療養所に行って、ここで何が起こって、どういう人が暮らして、今どうなっているかを知ることができる。そういう状態にできたのも、その人たち自身なんですよ。隔離のために作られた場所だけど、ひとりひとりの私が生きてきた場所として読み換えてきた。そういう意味で、この人たちはここを自分たちの場所にできたんだと思ったときの感覚と、長谷川さんのお話との接点が、私のなかにありました。

長谷川 過酷な状況のなかで、みなさん光を見ているんですね。人間本来の明るさというか、暗ければ暗いほど、根源的な、何が大切で何が輝いているのかを身をもって私たちに伝えるものをもっていらっしゃる存在だと思うので、たんに不幸で悲しい生涯だったというのではなくて。ハンセン病の方々も、降りてくるときに潜在意識で決めたんだと思うんです。どのいのちも意味があると私は思いたいというか。今日は考える機会をいただいてありがたかったです。

西浦 この人たちを、この人たちとして見るというか、その人であってほしいですね。その人がどう生きたかということにもっと注目したい。それは決して持ち上げるという意味ではなくて、私たちが見えなくしてしまったものをいっしょに探していきたい。単純にいつも驚かされているので、それをみなさんにも味わっていただきたいと思っています。

（まとめ：岡村幸宣）